系統的に展開する歴史的分野の授業の構想と展開
―「近世の日本」の実践を通して―

大迫　宣之

はじめに

本稿は、昨年、山口県中学校社会科研究会（以下、県中社研）の研究成果の一部として県内の社会科教師に対して提案した実践を加筆・修正したものである。

県中社研が設定した研究主題は次の通りである。

「知識を磨き続ける力を育む授業の創造
～豊かで価値ある思考の展開を通して」

周知のとおり、学校を取り巻く課題が山積している。生徒に関して言えば、学力や体力の向上、コミュニケーション能力や他者を思いやる心の育成、国際感覚を身に付ける態度、地域への愛情、情報モラルの育成など挙げればきりがないほどである。一方で、教師に関しても、数年後の大量退職時代を迎え、教師の指導力を伸ばすことが喫緊の課題として求められている。

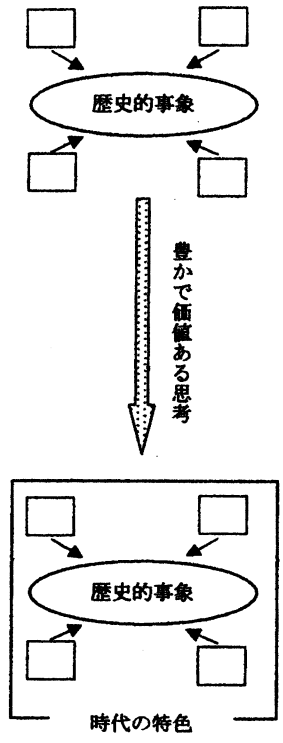
我々はこうした多様な要望に対して、授業改善を通して課題解決を目指すというシンプルかつ深淵な研究を進めてきた。よりよい授業を創り出し、提案していくことを使命としている。我々が授業のあり方を追究する中で欠かすことができない要素が「思考」と「知識の創造」である。そこで、研究仮説を次のように設定した。

社会的事象に対して多面的・多角的に考え、多様な意味を見出す『豊かな思考』と、事象を成立させている社会の本質の部分へと迫っていく『価値ある思考』の両方が関わり合う過程を重視した授業を繰り返し実施することにより、生徒は自分なりの意見を構築するだけでなく、学習の結果として自分が形成した知識を何度も更新し、質的に向上させていくことができるようになり、変化の激しい社会においてよりよく生きる個として必要な資質を身に付けることができる。

常に変化し続ける社会でよりよく生きるためには、自分なりの知識を形成するだけでは不十分である。思考の結果として導き出された知識が、その後直面する諸課題に対して有効に働くものになる必要がある。そのためには、自分が形成した知識を何度も更新し、質的に向上させる姿が求められるのである。

一　歴史的分野における「知識を磨き続ける力」

歴史的分野において「知識を磨き続ける力」とは、「時代の特色をとらえ、深める力」である。そして、生徒に時代の特色をとらえさせるためには、「歴史的事象の多面的・多角的な考察を通して、時代の特色をとらえていく作業を繰り返させること」が有効である。この作業こそ歴史的分野における「豊かで価値ある思考の過程」である。



このような学習を繰り返し、時代の特色をとらえる力を磨いた生徒は、未知の歴史的事象に出会ったとしても自分の力で事象を分析し、時代の特色に位置付けていくことができるようになる。

しかしながら、我々の授業実践を振り返ってみると、時代の特色をとらえる力を生徒に身に付けさせる上で、幾つかの課題や問題点が浮かび上がってくる。例えば、新しい学力観以降、課題解決的な単元が仕組まれ、学習が展開されることが多くなった。これまで課題解決的な学習の実践を振り返ってみると、次のような功罪があった。

課題解決的な学習の「功」	課題解決的な学習の「罪」
○教師が物語的に語り、講義・解説型と揶揄された従来の授業を、ダイナミックな課題の下で展開される授業へと転換し、生徒の歴史を学ぶことへの関心を高めることができた。 ○課題の解決という脈略の下で生徒の関心を継続させながら授業が展開された。	○課題解決という脈略の下で、取り上げる歴史的事象が取捨選択され、学習指導要領が取り上げるよう求めている内容と一致しないことがあった。 ○課題解決という脈略で歴史的事象を考察するため、歴史的事象を時代の特色に位置付けることが難しかった。

また、課題解決的に授業を展開する教師が増える一方で、依然として教師が時代の流れを物語的に語り、講義・解説を繰り返す授業も展開された。また、近年ではより多くの知識を生徒に詰め込むために穴埋め式のワークシートやドリル学習が復権する兆しすらある。

学習を通して時代の特色をとらえた生徒は、たとえ授業で取り上げなかった歴史的事象に出会ったとしても、学習の成果を活用して自分で歴史的事象を考察し、理解することができる。また、時代の特色をとらえるために必要な学び方を身に付けた生徒は、時代をとらえる力を磨き続けることができる。これこそ、知識を磨き続ける力を獲得した生徒の姿である。

「時代の特色をとらえ、深める力」を生徒につけさせていくために、我々が提案するのは、「系統的に展開する歴史的分野の授業の構想と展開」である。ここでいう系統性とは、「時代の特色をとらえる」という系統性である。生徒にあらかじめとらえさせたい時代の特色と取り上げる歴史的事象を提示し、提示した時代の特色と歴史的事象の関係をとらえ

させていく。このような学習を展開することで、生徒に歴史的事象の考察を通して時代の特色をとらえ、知識を磨き続ける力を育てていくことができると考えている。

二　系統的に展開する歴史的分野の授業

系統的に進める歴史的分野の学習は、次のような流れで展開していく。

時代の概観
↓
時代の特色と歴史的事象の提示
↓
歴史的事象の考察
↓
時代の特色のまとめ
↓
他の時代との比較

(1) 時代の概観

ここでは、生徒は学習の対象となる時代を大まかに把握する。歴史的分野の学習では、最初に年表を活用し、学習の対象となる時代を概観することが大切である。既有知識が決して多くない中学生にとって、全体像を掴んでおく必要性は大きい。この場面では次のようなことを生徒に表出させ、確認しておきたい。

○対象となる時代はいつ頃からいつ頃までか
○どんなできごとがあった時代か
○同じ頃世界ではどのような動きが見られたのか

(2) 時代の特色と歴史的事象の提示

次に、教師が設定した時代の特色と特徴づける象徴的な歴史的事象を提示する。この時点では、多くの生徒は自力で教師が提示した時代の特色と歴史的事象を結び付けることはできない。そこで、教師の解釈に基づく時代の特色と事象の妥当性について投げかけ、前時の概観した内容と結び付けて、疑問点を表出する場面としたい。この疑問をその後の授業に用いる。

(3) 歴史的事象の考察

ここで、生徒は具体的に歴史的事象について考察を行う。先にも述べたようにこの部分が歴史的分野の学習の中心となることは言うまでもない。

教師が選択した歴史的事象について、さまざまな資料をもとに多面的・多角的に考察しながら、時代の特色をとらえていく。ここで留意すべきは、歴史的事象の考察のために学習課題を立てるものの、あくまでもねらいは時代の特色をとらえることであり、単に課題を明らかにするだけではないということである。

(4) 時代の特色のまとめ

生徒は、これまでの学習を振り返り、時代の特色をまとめる。これは、時代の特色を理解するために有効な作業である。今回の学習指導要領において言語活動の充実の一つの方策として「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動」が設定されたことからも分かる。ここでは、単元の初めに提示した時代の特色と照らし合わせ、「教師が提示した時代の特色が妥当かどうか」を生徒に問う。

実際には、レポートを作成し、生徒に時代の特色をまとめさせることが多いだろうが、これだけでは十分とは言えない。例えば、次のような授業を仕組み、生徒に時代の特色を再検討させていくことが有効である。

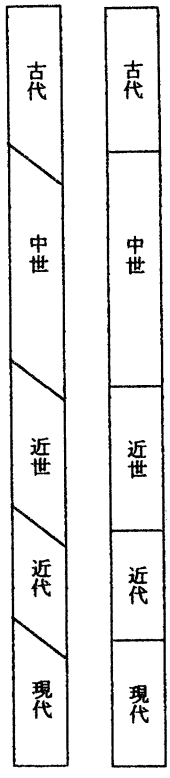
○一つのレポートを取り上げ、そのレポートの是非を検討することを通して、時代の特色を理解させる。
○二つのレポートを取り上げ、そのレポートを比較させることを通して、時代の特色を理解させる。

(5) 他の時代との比較

生徒は、いったん時代の特色をまとめた上で他の時代と比較する。こうした場面を設定するのは、一つの時代の特色を理解する上で、他の時代と比較し、共通点や相違点を明らかにすることが有効であるからである。

前回の学習指導要領で時代区分の幅が大きくとられたことにより、時代を比較しやすくなったが、実際には時代と時代はある時点で直線の境目が区切られるものではなく、ゆっくりと変化し移り変わっていくものである。

様々な視点から時代と時代を比較させていくことで、このことを生徒にとらえさせ、歴史観を豊かなものにしていくことができる。



三　単元づくりの実際

前項では、歴史的分野の授業の基本構造を述べた。そこで、本項では学習指導要領「歴史的分野の大項目（4）近世の日本」をもとに、実際の単元づくりについて述べたい。

(1) 時代の特色の設定

本実践では、「大項目（4）近世の日本」の時代の特色を「武士の時代」と設定し、近世を幕藩体制の確立から崩れの過程ととらえた。そこで中項目ア～エに記される内容を分析し、次のように「時代の特色」を設定した。

大項目	中項目	時代の特色
近世の日本【近世は武士の時代である】	ア	天下統一の時代
	イ	幕藩体制確立の時代
	ウ	町人台頭の時代
	エ	貨幣経済の時代

① 近世全体の特色「武士の時代」

これまで中世全体の特色を「下剋上の時代」と設定し、学習を進めてきた。中世との時代の連続性から、中世の時代の特色も「武士の時代」と言えなくもない。しかし、武士の支配が浸透する一方で、社会の秩序や身分が混沌とした中世から、武士の支配による安定した社会が構築された近世では、「武士の時代」の意味合いが異なってくる。そこで、武士の支配がより強固になった近世全体の時代の特色を「武士の時代」と設定した。

②　中項目アの特色「天下統一の時代」

この時代は中世の社会秩序が崩壊し、近世の社会秩序が成立する過程の時期である。ヨーロッパ人来航の影響を背景に、信長、秀吉と続く一連の統一過程の中で、中世までの勢力が力を失い近世社会の基礎が築かれた。このことから、時代の特色を「天下統一の時代」と設定した。

③　中項目イの特色「幕藩体制確立の時代」

幕府や藩による支配体制が確立し、大きな戦乱のない安定した世の中が築かれた時代である。幕府による様々な政策のもと、下剋上がおさえられ、中世とは異なる強固な武家政権が誕生した。このことから、この時代の特色を「幕藩体制確立の時代」と設定した。

④　中項目ウの特色「町人台頭の時代」

安定した世の中のもと、産業や交通の発達にともない大阪・京都・江戸などの都市が繁栄した。その担い手となった町人が経済力を高め、町人を主体とした文化を形成していくことになる。このことから、この時代の特色を「町人台頭の時代」と設定した。

⑤　中項目エの特色「貨幣経済の時代」

貨幣経済の浸透にともなう社会の変化や自然災害、外国船の接近など近世の社会が動揺した時代である。財政難に陥った幕府は幕政改革によって立て直しを図るが、農村に貨幣経済が広がり商人が経済力を持つようになると、米中心の徴税方法が限界に達し、いずれも成果を上げることができなかった。このことから、この時代の特色を「貨幣経済の時代」と設定した。

(2)　歴史的事象の選択

授業で扱う具体的な歴史的事象の特定については、これまで教師の勘や経験に頼る部分が多かった。しかし、現行の学習指導要領では、学習内容の構造化・焦点化の方策が示された。それに従って設定した時代の特色を基準に歴史的事象を精選・厳選することができる。

例えば、中項目アでは「天下統一の時代」という時代の特色を理解するためには、「中世の社会構造の崩壊」という視点から歴史的事象を選ぶとよい。「天下統一の時代」をとらえさせるために選んだ歴史的事象は、次のとおりである。

		事項	特定した歴史的事象	
【中項目アの内容】日本の近世社会の基礎がつくられていったこと。	天下統一の時代	戦国の動乱	分国法の制定	戦国大名は領国支配のため、家臣団の服従や、領国での産業の育成を行った。
		ヨーロッパ人来航の背景とその影響	ポルトガル人の漂着	新航路の開拓や宗教改革を背景に、鉄砲とキリスト教が日本に伝わり、天下統一に大きな影響を与えた。
		織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係	信長と本願寺の争い	信長の経済政策や宗教政策により寺社等の勢力が衰退し、中世の秩序が崩壊した。
			太閤検地・刀狩の実施	秀吉が行った諸政策により、武士と農民の身分が分かれ、農民が確実に税を払う仕組みが整い、近世社会の基礎が築かれた。
			バテレン追放令	秀吉は、キリスト教の布教とスペイン・ポルトガルの侵略政策が結びついていることを危険視し、キリスト教を禁止した。
		武将や豪商などの生活文化の展開	茶の湯の普及	日本の統一過程で、大名・町衆などが経済力を持ち、豪壮・華麗な文化が生み出された。

(3)　単元構成

上記の分析から導き出した内容をもとに、中項目アの単元を次のように構成した。

◎単元構成表

次	学習内容・活動		本時の学習課題および授業後にとらえさせたい時代の特色
1	時代の概観および単元を貫く課題の提示		単元を貫く課題の提示：【近世は武士の世の中である】という解釈の是非
2	天下統一の時代【中項目ア】	中項目アの時代の概観 時代を特色づける歴史的事象の提示	【時代を特色づける歴史的事象】 ・分国法の制定　・ポルトガル人の漂着 ・信長と本願寺の争い　・太閤検地・刀狩の実施 ・バテレン追放令　・茶の湯の普及
3		分国法の制定	学習課題「なぜ大内氏は分国法を作ったのか」 ○戦国大名が領国支配のため、家臣団の服従や、領国での産業の育成を行った。
4		ポルトガル人の漂着	学習課題「鉄砲が全国に広まったのはなぜか」 ○新航路の開拓や宗教改革を背景に、鉄砲とキリスト教が日本に伝わり、全国統一に大きな影響を与えた。
5		信長と本願寺の争い	学習課題「なぜ信長は石山本願寺と約10年間争ったのか」 ○信長の経済政策や宗教政策によって寺社等の勢力が衰退し、中世の秩序が崩壊した。
6		太閤検地・刀狩の実施	学習課題「なぜ秀吉は太閤検地・刀狩を行ったのか」 ○秀吉が行った諸政策により、武士と農民身分が別れ、農民が税を払うシステムが整い、近世社会の基礎が築かれた。
7		バテレン追放令	学習課題「信長と秀吉で、キリスト教に対する対応が異なるのはなぜか」 ○秀吉は、キリスト教の布教とスペイン・ポルトガルの侵略政策が結び付いていることを危険視し、キリスト教を禁止した。
8		茶の湯の普及	学習課題「なぜ戦国大名の間で、茶の湯がもてはやされたのか」 ○日本の統一過程で大名・町衆が南蛮貿易によって経済力を持ち、豪壮・華麗な文化が生み出された。
9		まとめ	○鉄砲・キリスト教の伝来を背景に織田信長・豊臣秀吉による中世勢力の排除と兵農分離により近世社会の基礎が築かれた。

四　実践例

次に、近世の学習を終えた時点、すなわち中項目アから始まり、中項目エが終わった時点の「時代の特色のまとめ」と「他の時代との比較」の授業の様子を生徒のレポートや授業での発言を中心に紹介する。現行の指導要領で新設された「各時代の特色をとらえる学習」にあたる授業である。実際には、レポートを作成し、生徒に時代の特色をまとめさせることが多いだろうが、これだけでは十分とは言えない。そこでレポートを使った授業を仕組み、生徒に時代の特色を再検討させていくことが有効である。本実践は、生徒が作成したレポートを使って授業を行い、生徒がとらえた時代の特色がどのような深まりを見せたかを検証したものである。

(1)　実践事例1「時代の特色のまとめ」

①　授業前の生徒の認識

学習のまとめとして生徒にレポートの提出を求めた。これまでの授業で生徒が近世の特色をどのようにとらえていたかを確認し、単元の最初に提示した近世全体の特色である「武士の時代」を再検討させるためのレポートである。上に示すのは、提出されたレポート分析とその内容の一部である。

このように、生徒はそれぞれの立場からレポートを作成した。この単元の学習を通して、大半の生徒は近世全体の特色を「武士の時代」と認識している。しかし生徒が述べた時代の特色は一面的なものであり、

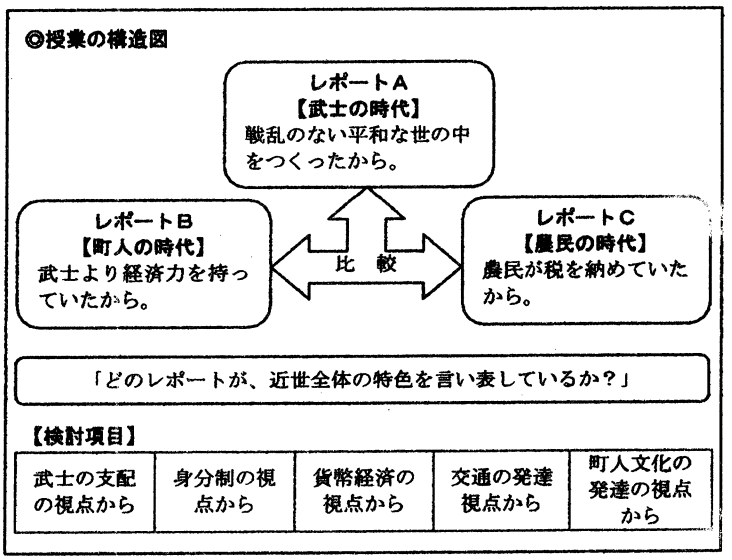
◎レポートの分析　「近世は武士の時代と言えるのか」

＜言える＞	＜言えない＞	
	町人の時代である	農民の時代である
＜おもな根拠＞ ・幕藩体制を確立し、平和で戦乱のない世の中をつくったから。 ・交通網の基盤を整えたから。 ・身分を確立し、農民や町人を支配したから。	＜おもな根拠＞ ・商人が産業や商業を発展させたから。 ・商人から借金をしている武士が多かったから。 ・町人のおかげで都市や文化が栄えたから。	＜おもな根拠＞ ・農民が納める年貢で武士を支えているから。

近世の特色を十分言い表しているものではない。そこで、授業では「武士」、「町人」、「農民」のレポートの比較から、近世の特色の再検討を行うこととした。

② 授業の実際

本時では、左図のように、「武士」、「町人」、「農民」のレポートを比較し、近世全体の時代の特色の理解を深めさせることをねらいとした。



生徒は「武士」、「町人」、「農民」のそれぞれの立場をとりながら、図中の事柄が近世社会に及ぼした意義や影響について述べた。意見が交わるところを指摘しながら、それぞれの立場の意見を比較していたのである。そこで、「身分制」に関する意見と「経済」に関する意見を取り上げ、討論を促すために、「『身分』と『経済』のどちらに着目すれば、時代の特色が明らかになるか」と問い直した。

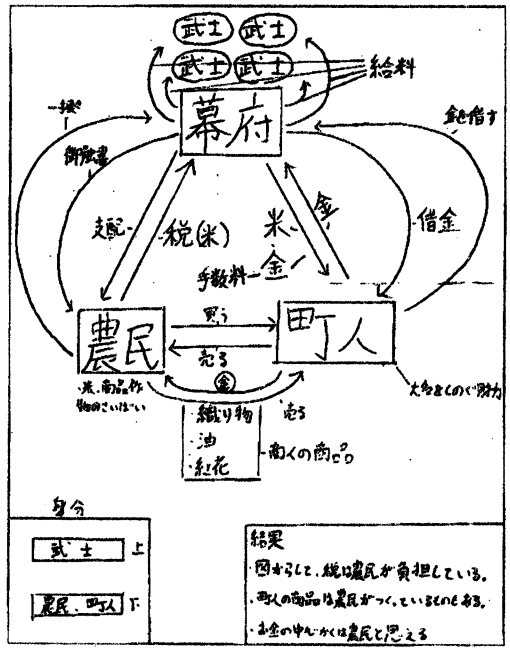
生徒は、表出された意見が交わるところとこれまでの学習内容を確認しながら、近世の特色を決定づけるものについて考察した。次に示すのは意見を整理した表である。

「身分」に関する意見	「経済」に関する意見
・武士がつくった身分制によって平和な世の中になった。 ・武士を頂点とした身分によって農民が確実に年貢を納めた。 ・身分が定まらなければ、中世のような混乱した世の中になる。	・経済力を持った町人が、交通網を活用して商品を取引し商業を発展させた。 ・武士が商人から借金をするなど、経済力で町人が武士を上回った。 ・最終的には「金」が商人のところに集まった。

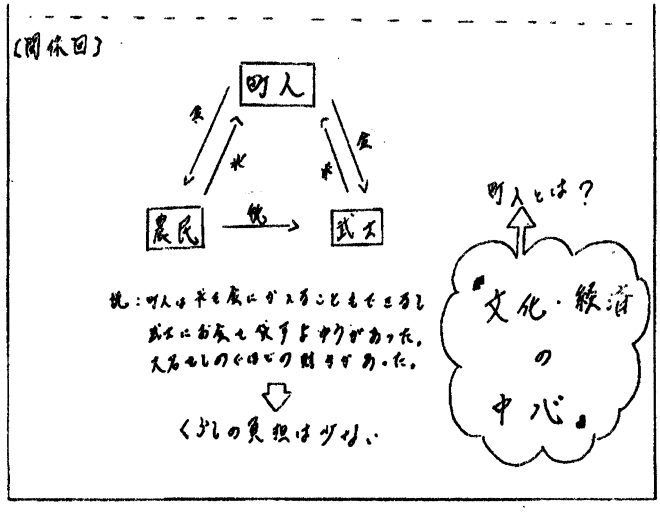
討論の中で生徒は「武士」、「町人」、「農民」それぞれの関係性に着目し、意見を述べるようになってきた。そこで三者の関係性を整理するために、作図するよう促した。

授業ではこれらの関係図をもとに、「武士」、「町人」、「農民」それぞれの関係性を明らかにしながら、近世全体の特色の理解に迫った。これまで学習した歴史的事象の確認を行うとともに、税の流れに着目させながら、幕政改革の内容と照らし合わせて米中心の納税方法が限界に達したことを確認した。

《ア　身分や税、貨幣や商品に着目した関係図》



《イ　税や貨幣の流れに着目した関係図》



③　授業後の生徒の認識

生徒が最終的にとらえた近世の特色からもわかるように、授業前に実施したレポートの内容とは変化しているものが多い。生徒がとらえた一面的なものの見方から、授業でレポートや意見の比較を行うことにより、「武士」、「町人」、「農民」それぞれの立場を踏まえて、近世の時代の特色を考察していることがわかる。

◎授業後の生徒のレポート例

A 身分は武士の方が上だけど、町人が武士のつくったもの（支配の仕組み、交通網）を利用して、力（経済力）を持った時代である。	B 武士と農民の身分がはっきり分かれた時代であり、武士が平和な世の中をつくったので、町人が活躍でき、経済や文化が発展した時代である。
C 武士がつくった社会のおかげで、農民が平和に暮らし、町人が経済力を持った時代。（武士の時代と言えば間違いではないが、武士の力だけではなく、農民や町人に支えられている）	D 税を納めるのは農民であり、武士の生活を支えていた。しかし、お金が世の中に出まわりお金で物事が動く時代になったため、町人が活躍した。
E 武士が世の中を平和にして、その社会の中で農民が年貢を払い、町人は年貢をお金に換えて、文化や経済の中心に立った時代。	F 武士は世の中の仕組みを整えたけど、商人から借金をしている武士が多く、町人の経済力がなければ、武士は成り立たなかった。

(2)　実践事例2「他の時代との比較」（中世と近世の比較）

①　授業前の生徒の認識

「他の時代との比較」の授業を行うにあたり、前時と同様に宿題としてレポートの提出を求めた。中世と近世の境目を探させることで二つの時代の特色を比較し、時代の特色について、理解をより深めることが目的である。次に示すのは、生徒が提出したレポートの分析とその内容の一部である。

◎レポートの分析　「中世と近世の境目はどこか」

中世と近世の境目	境目にした理由
ヨーロッパ人の来航	スペイン・ポルトガルが日本にやってきたことにより、鉄砲とキリスト教が伝わり、天下統一が進んだから。
太閤検地・刀狩・兵農分離	秀吉が太閤検地や刀狩を行ったおかげで、武士と農民の身分が分かれ中世から近世になった。
江戸幕府の成立	江戸幕府が実施した様々な政策で、中世の混乱した時代から近世は安定した時代になったから。
鎖国	中世は外国との貿易に制限はなかったが、近世は鎖国によって外国との関係を制限したから。
文化の発達	中世の文化の担い手は、その時代の支配者が中心であったが、近世の文化の担い手はおもに町人だったから。
交通の発達	中世はいたるところに関所があったが、近世は関所があるが江戸幕府によって五街道などが整備され、全国の交通網が結ばれたから。

この時点では、生徒は漠然と二つの時代の変化をとらえている様子であり、中世と近世の共通点や相違点を述べたものはほとんど見られなかった。中世と近世の二つの時代に対して、生徒なりの中世観、近世観はさほど意識されていなかったと言える。そこで実際の授業では、「江戸幕

府の成立」と「交通の発達」を取り上げ、どちらが境目としてふさわしいか話題を絞って問い、生徒の中世観と近世観を表出させることにした。

② 授業の実際

本時は、先述したように、他の時代との比較によって、近世の特色についての理解をより深めることをねらいとした。

◎授業の構造図

レポートA
【江戸幕府の成立】
信長・秀吉の政策を受け継ぎ、武士の支配が完成した。

比較

レポートB
【交通の発達】
近世は五街道や海上交通によって全国が結ばれた。

「江戸幕府の成立と交通の発達のどちらが中世と近世の境目としてふさわしいか」

【検討項目】

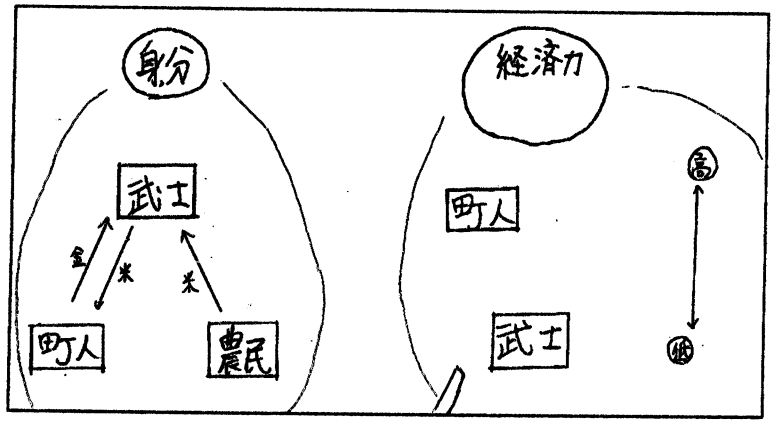
武士の支配の完成の視点から	身分制の視点から	外国との交流の制限の視点から	交通網の広がりの視点から	町人文化の視点から

はじめの発問では、中世と近世の境目としてふさわしいレポートを生徒に選択させ、その根拠を発表させた。下に示す表は、その意見を分類したものである。

この時点では、それぞれのレポートの近世の特色を発表しているに過ぎず、中世との比較が十分なされていない。そこで交通網の広がりに関する意見が交わっていることを指摘し、「交通の発達を担ったのはどんな人々か」と問い、交通の発達が町人の台頭を示すものであることを確認した。また、レポートAに着目している生徒は近世を「武士の時代」、レポートBに着目している生徒は近世を「町人の時代」ととらえていることを指摘した。

◎レポートの分析　「江戸幕府の成立と交通の発達のどちらが中世と近世の境目としてふさわしいか」

	レポートA「江戸幕府の成立」	レポートB「交通の発達」
武士の支配の完成に関する意見	・武士による支配が確立した。 ・幕藩体制を整えた。 ・全国の4分の1を支配した。	
身分制社会に関する意見	・武士が農民や町人を支配した。 ・身分制度を確立させた。	
外国との交流の制限に関する意見	・鎖国をおこない、外国との交流を制限した。	
全国的な交通網の広がりに関する意見	・幕府が五街道などの交通網を整備し、全国が結ばれた。	・交通の発達によって、商品が全国でやりとりされ、商人が経済力を持った。 ・町人によって西廻り航路などが整備され、大阪などの都市が繁栄した。
町人を担い手とする文化に関する意見		・経済力を持った町人が担い手となる文化が発展した。



前時で学習した「武士」、「農民」、「町人」の関係性をもとに、室町と江戸を比較した幕府の支配に関する意見や町人の経済力に関する意見が表出された。討論の中で、ある生徒が武士と町人の関係の変化に着目し、「町人の台頭は下剋上と言えるのではないか」と発言した。これは中世の特色と中世と近世の連続性に着目した意見である。上に示すのは、その生徒が前時に作成した関係図である。

そこで、中世と近世の共通点と相違点を考察するため、「町人の台頭は下剋上と言えるか」と問うた。

この問いに対し、大半の生徒が「言えない」と答えた。下剋上という概念が「武力で打ち勝つ」というイメージがあったからであろう。そのおもな理由は「町人が武力で政権を取ったわけではない」、「支配者は武士である」などである。しかし「言える」と答えた生徒は、町人の経済力や武士の支配の枠を超えて町人が整備した航路に着目し、「身分が下の町人が経済力で武士に打ち勝った」と述べた。

このように、「下剋上の時代」という中世の特色を近世に当てはめることにより、「武士の時代」という近世の特色についての理解を深めることができる。次に示すのは、最終的に生徒がとらえた「中世と比較した近世の特色」のレポートの一部である。

③　生徒がとらえた「中世と比較した近世の特色」

生徒は「下剋上の時代」という中世の特色と比較した近世の特色を、次のようにまとめた。

◎授業後の生徒のレポート例

A 中世は、武力で身分が下の者が身分が上の者に打ち勝ったけど、近世では、経済力で身分が下の者が身分が上の者に打ち勝った時代である。	B 中世の近世も下剋上という意味では同じことが起こっているが、近世は町人が経済力という形で打ち勝った。それは、近世は身分がしっかり分かれていたから。
C 中世の武士は武力によって支配者となった。それに対して、近世の武士は武力をふるわず、政治の安定に力を尽くした。	D 中世は武力の時代で、近世は経済力の時代である。(近世は身分が決まっているが、実際は、経済力で力関係が決まった。)

中世と近世の境目を考察したレポートは漠然と中世から近世への境目を述べていたが、授業をふまえたレポートでは、中世の特色をふまえて近世の特色を述べていることがわかる。このようにレポートを比較した授業を仕組み、時代の特色を再考察させることにより生徒に価値ある思考が生まれ、歴史観を豊かなものにしていくことができる。

おわりに

現行の指導要領では、「各時代の特色をとらえる学習」が新設された。学習した内容を活用して時代を大観し表現する活動を通し、その時代の特色がどのようなものだったのかをとらえる学習である。

先にも述べたように、「系統的に展開する学習」では、あらかじめ教師が設定した時代の特色と歴史的事象を提示する。生徒は、時代の特色と歴史的事象を関連付けて考察しながら、教師が提示した時代の特色が確からしいかどうかを検証し、その時代の特色をまとめていくことになる。この点からも、学習指導要領の分析から導き出された「時代の特色」の設定が重要な鍵となることが明らかである。これまで時代の特色について曖昧にされたまま、個別の歴史的事象の分析にのみ終始する実践が多く見られたが、本実践のように単元を構成すれば学習内容が整理され、生徒にとって「時代の特色」という知識を形成しやすいように思われる。

さらに、近世の学習のまとめとして、中世との比較を行うというように、時代を往復することで、生徒のもつ時代像を見直す場面として設定することができる。

あとがき

下向井ゼミの劣等生でしたが、何か下向井先生に恩返しをという気持ちで、稚拙な文章を紹介しました。日々、どのような授業を構想すれば、生徒が豊かな歴史観をもつことができるのか悩みつつ、授業づくりに励んでいます。

（宇部市教育委員会）

執筆者紹介

坂本賞三　一九二六年生
広島大学大学院文学研究科博士課程修了

下向井龍彦　一九五二年生
広島大学大学院文学研究科博士課程修了

大迫宣之　一九七三年生
広島大学大学院学校教育学研究科博士課程前期修了

渡邊　誠　一九七七年生
広島大学大学院文学研究科博士課程後期修了

大学院演習『小右記』講読担当者一覧②

演習日	担当条	担当者
二〇〇九年（承前）		
五月二九日	寛弘五年十二月廿日条	上吹越務
六月五日	寛弘六年十一月廿五日～廿七日条（逸文）	江波曜子
六月一二日	寛弘六年十一月廿九日～十二月二日条（逸文）	釈　就美
六月一九日	寛弘六年十二月四日～廿四日条（逸文）	井浪真吾
六月二六日	寛弘八年正月一日～正月八日条	包黎明・野田知・江間さやか
七月三日	寛弘八年正月九日～正月十六日条	上吹越務
七月一〇日	寛弘八年正月廿一日条	江波曜子
七月二四日	寛弘八年正月正月廿九日条	釈就美・井浪真吾
七月三一日	寛弘八年正月廿三日・廿八日・二月一日・二日条	包黎明・野田知・江間さやか